

一一一 每早、涼氣佳適なるも、既にして日漸く上れば、熱漸く苦し
く、殆んど消遣し難し。夕にして風、山窓より入れば、則ち煩襟洗ふがご
とく、快、言ふべからず。これを人の一生に譬ふれば、百年の間、順逆
得喪、環の端なきがごとし。亦何ぞ以つて吾が懐ひを掛くるに足らん。直
これを一笑に付すすべきのみ。

毎早涼氣佳適、既に而日漸上、熱漸苦、殆難消遣、夕而風自山窓入、則煩襟如

洗、快不可言、譬之於人之一生、百年之間、順逆得喪、如環無端、亦何足以掛

吾懷、直可附之一笑耳。

【訳】 早朝はいつも涼しく快適であるが、すぐ日が上り熱気は息苦しいほどに高
まり、避けることができない。夕方になり、風が窓から入れば、心の悶えまで洗
われるようで、その心地の良さは言葉にできないほどだ。これを人の一生に例え
てみれば、百年の間、良いことや悪いこと、成功や失敗とかが、丸い輪の端がな
いようにくりかえされるのだ、ということだ。だから、さまざまな出来事などど
うして気にかける必要があるだろうか。ただこれを一笑にすればいい。

一一二 小童を拉し、長竿を持ち、前溪に沿ひて魚を釣る。殆んど亦世外
閑適の一游なり。

拉小童、持長竿、沿前溪而釣魚、殆亦世外閑適之一游、

【訳】 幼い子供を連れ、長い竿を持って、前の谷川に行き、魚を釣る。このこと
は、煩わしい浮き世の外の心静かなひとときの楽しみである。

一一三 庭前の竹、数根叢を為す。風晨月夕、幽趣乏しからず。物の微とい
へども、亦以つて自ら楽むに足る。

庭前之竹、數根爲叢、風晨月夕、幽趣不_レ乏、雖物之微、亦足以自

樂_一矣

【訳】 庭の竹が、幾本か重なり竹やぶとなっている。風の吹く朝、月の明るい夜

などに、この竹が風に揺れ、月に照らされているのを見ると、静かで趣のある風情を感じる。小さな取るに足りないことであるけれど、これが私を十分に心慰め樂しませてくれるのだ。

一一四 鏡を把りて自ら照らせば、兩鬢白きものを生ず。因りて惕然として警省するの念なくんばあらざるなり。蓋し書を読むこと年ありといへども、悠悠泛濫して、率空過に属す。今に及びて実効を収めざれば、則ち一生の建堅、果して是れ何物ぞ。昔人のいはゆる朧月三十日は必定到来す。期に臨みて豈に能く手忙しく脚乱れざらんや。一念此に至れば、毛立ち神寒し。

把鏡自照、兩鬢生白、因不無惕然警省之念也、蓋雖讀書之有年、而悠悠泛濫、率屬空過、不及今収實效、則一生建堅、果是何物、昔人所謂朧月三十日必定到來、臨期豈能不手忙脚亂、一念至此、毛立神寒、

【訳】鏡を取って自分を見れば、両方の耳ぎわの髪に白いものが見えてきた。それで、恐れ慎んで省みずにはおれない。思うに、書物を読むことに何年もかかってきたというものの、悠々とのんびりと世俗にしたがってしまつて、無駄に過ごしてきてしまった。今になつても、自分の身に力がついていない。一生かかつて自分を打ち立てようとしてきたのに、それは何だったのか。昔の人が言う、十二月三十一日というおしまいの時は必ずやってくるのだ。そのときになつて、慌てふためくことになるう。ここまで考えてくると、おそれおののいて、体中がぞつとし寒気がしてくる。

一一五 余、果実の、樹にあるを観るに、其の始めは色青く味渋し。時日を累ね風霜を経て熟するに及べば、則ち葉落ち枝枯れ、累然として珠のごとし。取りてこれを喫せば、珍羞の美といへども、殆んど若かざるものあり。噫、人も亦老大の身を以つてするも、胸中尚ほ渋味の存するあれば、

則會^{すなわち}此の果にこれ如^しかざるなり。

余觀^ニ果實之在^レ樹、其始也色青味澁、及^ニ累時日^一經^ニ風霜^一而熟、則葉落枝枯、纍然如^レ珠、取而喫^ニ之、雖珍羞之美、殆有^ニ不若焉者^一矣、噫人亦以^ニ老大之身^一而胸中尚有^ニ澁味之存^一、則會^ニ此果之不^レ如也、

【訳】私が樹になっている果実を観察すると、初めは実の色も青くて味も渋い。

時を重ね、風や霜にあたって実が熟してくると、葉は枝も枯れて、実は重なり合って輝く珠のようになる。取ってこの実を食べてみると、他にどんなに料理や珍しい食べものであっても、これに及ぶものはないと思えるほどおいしいのだ。ああ、私も年老いたといっても胸中にはまだ未熟な心があり、とうていこの果実に及ばない。

一一六 昔、太公命世の才を以つて、漁^{ぎょう}釣^{ちよう}窮^{きゆう}困^{こん}し、年已^{すで}に老に向ふ。一旦、文王に遭遇するや、一言にして合ひ、以つて顕^{けん}榮^{えい}を致し、君を輔^{たす}け民を救ひ、遂に周家八百年の基業を開き、身は東海許大の封域^{はう}を創^{はじ}む。其の始め其れをして文王に遇はざらしめば、則ち特渭^{ただいひん}浜^{ひん}の一釣^{ちよう}叟^{そう}のみにして、他に向ひて豈に能くかくのごときの想を作すや否や。人の遭遇は固より測るべからず。貧賤の中に甚だ英雄あり。

昔者太公以^ニ命世之才^一、漁^ニ釣^ニ窮^ニ困^ニ、年已向^レ老、一旦遭^ニ遇^ニ文王^一、一言而合、以致^ニ顯榮^一、輔^ニ君救^ニ民^一、遂開^ニ周家八百年之基業^一、身創^ニ東海許大之封域^一、其始使^ニ其不^レ遇^ニ文王^一、則特渭濱之一釣叟、向他豈能作^ニ如此之想^一乎否、人之遭遇固不^レ可測、貧賤之中甚有^ニ英雄^一、

【訳】昔のことであるが、太公は当時の世にあつて才能に秀でていたが、魚釣りを仕事としていて貧乏に苦しみ、年も老いに入っていた。ところが、いったん文王に出会ったら、一言にして意思疎通し、名が表れるようになり、身が榮えるようになり、君主を補佐し、民を救い、とうとう周家八百年の基を築き、自身は斉

国の巨大な土地を収め始めた。その初めに文王に会わなければ、ただの渭水（黄河に通じる河の名）の魚を釣る一老人にとどまり、外のことに通じたり、それぞれの事によく適応した考えができたりはしなかっただろう。人の出会いというものは、どんな人を生み出すかわからないものだ。貧しく身分の低い人の中にも、すごい英雄がいるものだ。

一一七 大人^{たいじん}とは其の形の大なるを謂^いふにあらざるなり。小人^{しょうじん}とは其の形の小なるを謂^いふにあらざるなり。蓋し人の、大と為し小と為すゆゑんものは、乃^{すなわ}ち其の心の謂^いにして、其の形体の謂^いにあらざるなり。

大人者非^レ謂^レ其形之大也、小人者非^レ謂^レ其形之小也、蓋人之所以為大為小者、乃其心之謂、而非^レ其形體之謂也、

【訳】大人とはその形が大きいことを言うのではない。小人とはその形が小さいことを言うのではない。人について、大とか小とかいうのは、その心のあり方を言うのであって、体の形のことをいうのではない。

一一八 心の大小とは、果して何の謂^いぞや。大とは仁のみ、小とは不仁のみ。

心之大小、果何謂也、大者仁而已矣、小者不仁而已矣、

【訳】心の大きいとか小さいとは、どういうことか。大というのは、仁（徳）があること、小というのは、仁がないことである。

一一九 いはゆる仁者は人を視ること猶^なほ己^{おの}れのごとく、其の窮みは、家國天下の事を挙げて、己れの分内にあらざるなきなり。いはゆる不仁者は、纔^{わず}かに軀殼^{くかく}を認め以^{もつ}て己^{おの}れと為し、而して親戚兄弟も、視ること猶^なほ路人のごとし。況んや家國天下の事をや。

所謂仁者視人猶己、其窮也、舉家國天下之事、莫非己分内也、所謂不仁者、纔認軀殼以爲己、而親戚兄弟、視猶路人、況家國天下之事哉、

【訳】仁のある人が、他人を視るのは自分の事のようにして見、究極では、家や国や世の中のことも、自分のことのようにして見る。不仁者は、自分の身体に関わることだけを自分として見て、親戚兄弟さえも、自分に関係なく通りすがりの人のように見ている。まして、家や国や世の中の事になると考えようともしない。

一一〇 是の故に大人は、其の世に在るや、天下の人これを尊びこれに親しむ。其の没するや、後世の民これを哀しみこれを慕う。而るに不仁の人は、則ち人皆その生を苦とし、その死を幸いとす。

是故大人者、其在世也、天下之人尊之親之、其歿也、後世之民哀之慕之、而不仁之人、則人皆苦其生、而幸其死矣、

【訳】だから大人は、世の中にとくと、天下の人はみんな尊んで親しむ。その人が亡くなるとこれを悲しんでいつまでも慕うことになる。しかし、仁のない人は、その人がいることを迷惑に思い、その人が死ぬと喜ぶ。

一一一 天地の間、万類の中に就いては、人より尊きはなし。人より靈なるはなし。而るに自暴自棄、以つて此に至る、豈に憾むべきの甚しきにあらずや。

就天地間萬類之中、莫尊於人也、莫靈於人也、而自暴自棄、以至於此、豈非可憾之甚耶、

【訳】ひろくこの世のあらゆる生き物の中で、人より尊いものはない。人より靈なるものはない。それを知らず自暴自棄になって自分の前途を破壊し省みないものがある。なんと残念なこと甚だしいではないか。

一二二 山人、事に因りて感激し私に誓ふ。今よりして後、復た多くは山を下らず、専精砭砭として務め、此の事を了わらんと。

山人因事感激私誓、自今而後、不復多下山、専精砭々務了此事、

【訳】私はある事に感激し自分自身に密かに誓った。今から後も、今住んでいる所を離れずひたすら努力をして学問を修めると。

一二三 人の、世に在るや、世事牽纏は、勢ひ免るべからず。則ち此のごとく誓ふといへども、而も未だ必ずしも能く計る所のごとくならず。特一時の感に因りて、此のごとき想を為すのみ。

人之在世也、世事牽纏、勢不可免、雖則如此誓而未必能如所計、特因一時之感爲如此之想耳、

【訳】人がこの世に在ると、世間の俗事がつきまとうことは、自然の成り行きである。だから、努力することを誓ったとしても、もくろみ通りにはならないことがある。ただ一時の感慨によつてこのような思いをすることがある。

一二四 仮使一切断棄し、乃ち能くかくのごとくすとも、亦聖賢中庸の道理にはあらざるなり。

假使一切断棄乃能如是、而亦非聖賢中庸之道理也、

【訳】例え、一切を断ち切つて世間から離れて暮らしをしたとしても、それは聖賢中庸（人として行ふべき正しい道）の生き方とは言えないのだ。

一二五 吾が輩の学問は務めて其の弊を顧みる。而して立論の間、一毫の矯激の意をして存せしむるべからざるなり。これを毫厘に差へば、繆るに千里を以つてす。學術の、人を殺すは、洪水猛獸よりも甚し。

吾輩學問務顧其弊、而立論之間、不可使一毫矯激之意存也、差之毫釐、繆以千里、學術之殺人、甚於洪水猛獸、

【訳】私の学問はできるだけ間違ったところがないかを気にかけてる。そして、学問を主張するときには、ほんの僅かなことでも自分の主張を激しくするようなことは、押さえている。初めのちよつとした間違いでも、終わりには大きな間違いとなっているからだ。学問が人を殺すのは、洪水や猛獣の被害よりも大きいのだ。

一二六 洪水猛獣の害は、地に限られ、時に限らる。而るに學術の害は、則ち天下万世、其の毒を被らざるものなし。

洪水猛獣之害、限於地、時於時、而學術之害、則天下萬世、莫不被其毒者矣、

【訳】洪水や猛獣の害は、その土地、その時に限られている。しかし、学問の害は、世の中に永遠に害をもたらすものだ。

一二七 吾人鯁生の学は、其の得失は固より論ずるに足らず。然り而して其の規模は、則ち務めて平正廣大なるを要す。庸陋を以て自ら甘んじ、自ら廢弛すべからざるなり。

吾人鯁生之學、其得失固不足論、然而其規模、則務要平正廣大、不可以庸陋自甘、而自廢弛也、

【訳】私のようなつまらないものの学問は、その良いとか悪いとか論をするまでもないことかもしれない。しかし、その中味はできるだけ偏りがなく大きなものを心がけている。狭く小さなものをもって自ら甘んじていたり、自らおろそかにしてはいけないのだ。

一二八 文章の道は、其の意を立つるや正なるを要す。而してこれを出だ

すに奇を以つてす。奇ならざれば則ち凡に流れ、正ならざれば則ち僻^{へき}に入る。僻と凡とは、皆文章の至れるものにあらざるなり。

文章之道、其立意也要正、而出之以奇、不奇則流於凡、不正則入於僻、僻與凡、皆非文章之至者也、

【訳】 文章を作る道とは、その文章を書くこうとする意図が正しいことがまず肝要だ。そして、その意図に合った並ではない優れた表現をすることだ。優れた表現でなければ、平凡なつまらないものになり、文書を書くこうとする意図が正しくなければ、偏ったものになる。内容の偏りと平凡な表現というのは、よい文章ではない。

一二九 其の立意已^{すで}に是^ぜにして、其の開闔^{かいこう}・抑揚^{おうえい}・緩急^{かんきゅう}・疾徐^{しつじょ}・姿態を極め尽くす。而して一篇の間、必ず一段、人をして省發聳動^{せいはつしょうどう}せしむる処あるを要す。

其立意已是、而其開闔抑揚、緩急疾徐、極盡姿態、而一篇之間、必要有^あ一段使^し人省發聳動^{せいはつしょうどう}處^よ、

【訳】 文章の意図するものが正しいものであれば、その上に文章の調子が外に向かつて開いているとか、内に向かつて閉じられているとか、上がり調子か、下り調子か、ゆっくりとしているか、あわただしいか、速度が速いか遅いか、等々の様子や状況描写など最高に使いこなして表現していく。そして、一つの文章の中には必ず人を反省させ、教え導き、驚きで心を突き動かされる一か所があることが文章として肝要である。

一三〇 其の句を造るは、則ち長短、法あるを要す。其の字を下すは、則ち精當、宜しきを得るを要す。而して助辞の用は、尤も仔細^{しさい}に商量^{しやうりやう}して移易^{いえき}すべからざるを要す。

其造句、則要長短有^あ法、其下字、則要精當得^え宜、而助辭之用、尤要仔細商量^{しさいしやうりやう}不^な可^べ移易^{いえき}、

【訳】 その文章を作るには、長い短いにも決まりがあるのが必要だ。文字を決め

るのも、ぴったりと当てはまるものであるかが必要だ。そして、助辞を使用するのには、道理にかなうように細かいところまで考えて移し替えることができないようにすることが必要だ。

一三一 文章の法は氣象の急迫するを戒む。而して轉換の間、須く功夫を費すべし。邦人の、漢人に似ざるゆゑんものは、全く此處に在り。

文章之法戒「氣象急迫」而轉換之間、須費功夫、邦人之所以不似漢人者、全在此處、

【訳】文章の作法は、気持ちが焦ってはいけない。だから、場面が変わるところなどでは、いつでもよく工夫するのが当然だろう。日本人の文章が、漢人のと違ふところは、まったくこの点だ。

一三二 虚字の、文章の間にあるは、本甚しくは緊要ならざるの物件に似たり。而るに波瀾、洄洑、姿態横生、無量無辺、巧妙変化は、総て篇中兩三箇の虚字使用の処より生れ出で來たるものなり。却つて是れ第一緊要の物件なり。

虚字之在「文章間」本似「不甚緊要」的物件、而波瀾洄洑、姿態横生、無量無邊、巧妙變化、總自「篇中兩三箇」虚字使用處生出來者、却是第一緊要的物件、

【訳】助辞が文章の間にあるのは、さしせまって必要で無い物に似ている。しかし、文章の流れる調子、文体のあふれ出る無限の深みや変化は、みんな文章中にいくつかの助辞を使うことによって生まれてきたものだ。だから助辞は、これこそさしせまって必要なものなのだ。

一三三 身、文章を能くせざれば、則ち古人の書を読む能はず。讀む能はざるにあらず。乃ち終に夫の文章を能くする者の、讀み得て滋味あるに如かざるなり。故に余は門に及ぶの士に、常に教ふるに文章の法を以つてす。

身不能「文章」、則不能「讀」古人之書也、非不能「讀」也、乃終不如「夫

能」文章者之讀得有「滋味」也、故余於「及門之士」常教以「文章之法」

【訳】人は、文章をよく書くことができなければ、古人の書物も読むことはできない。読めないのではない。つまり、文章をよく書くことができる人が、古人の書を読んでもよく味わうことができるのだ。だから、私は門下生にいつでも教えるのは文章の作法である。

一三四 夫れ人は須く自ら知るべし。自ら知らざれば、則ち以って其の功を用ふるなし。

夫人須自知也、不自知、則無以用其功矣、

【訳】人はみんな自分自身を知らなければならない。自分を知らなければ、何も努力することができない。

一三五 自ら知るの後は、則ち須く其の病のある所よりこれを治むべし。而して以って其の病なきの体に復すべし。

自知之後、則須從其病之所_レ在而治之、而可以復其無病之體矣。

【訳】自分を知った後は、誰もその欠点のあるところからこれを治していくべきだ。そして、その欠点のないようにしなければならない。

一三六 人の心体は本病なし。病は則ち妄より生ずるものなり。而して妄の物たる、悠渺恍惚として、殆んど認識し難ければ、則ち其の功を用ふるや、亦必ず厳且つ密ならざるべからざるなり。

人之心體本無病、病則由妄生者也、而妄之爲物、悠渺恍惚、殆難認識、則其用功也、亦必不可不嚴且密也、

【訳】人の心の本体には、もともと欠点などない。欠点は自分へのいい加減さから生まれるものだ。自分へのいい加減さは、ぼんやりとしていて見定めがたく、自分ではほとんど認識できない。だから、自分を知って努力していくためには、必ず厳しくそのうえ綿密でなければならない。

一三七 此処に力を得れば、則ち一たび是ぜならば百たび是なり。此処に功を失へば、則ち一たび錯あやまてば百たび錯つ。古人の学の、独りを慎むを宗と為すゆゑなり。

此處得力、則一是百是、此處失功、則一錯百錯、古人之學、所以慎獨爲宗也、

【訳】自らの心の欠点を正すことができれば、常に正しく判断し続けられる。心の欠点を正す工夫や努力をしなければ、誤ちに誤りを重ねるようなものだ。古人の学問に言われてる「慎独」、すなわち独りあるときも心を正しく持ち、自分を慎むことを自分の生き方とする理由である。

一三八 千聖相伝の遺脈みながくのことを續つぎ、天地覆載てんちふくさいの洪恩こうおんを塞ふさぐ。而して人物万類をして咸みな若なくならしむるもの、其の基は実こゝに此にあり。

續千聖相傳之遺脉、塞天地覆載之洪恩、而使人物萬類咸若者、其基實在此、

【訳】多くの聖人が伝えてきた人の生き方の道を継いで、天地のような広大な仁愛の心を身に満たす。世の中の人みんなにこのような仁愛をもたらすその基は、この自分を知ることからきている。

一三九 嗚呼ああ聖人の道は高し、遠し。然り而して志あるの士は、小成を以つて自ら画かり、大業を以つてこれを人に推すべからず。

嗚乎聖人之道高矣、遠矣、然而有志之士、不可以小成自畫、而以大業推之於人也、

【訳】まあなんと聖人の道とは高くて遠いものだ。だから学に志す者は、小さな目標を成し遂げたことで、これできたと区切りを付けたり、大きな先の目標を掲げてこれを人に押し付けたりするものではない。

一四〇 「伊川いせんは、人の静坐を見る毎に、便すなはち其の善く学ぶを嘆ず」。静坐は実に是れ学問深切の功夫なり。

伊川每見_二人靜坐、便嘆_一其善學、靜坐實是學問深切之功夫、

【訳】北宋の学者伊川（程頤）は、人が静坐をしているのを見ると、「よく学問をしている」と感心したという話がある。静坐は実に学問を深めるのに適切な方法である。

一四一 人は平生事に応じ物に接して、朝より暮に至る。紛紛_{ふんぶん}榮榮として、日子を送り了_おはり、曾_{すなわ}ち自己は是れ何等の人物、何等の心地なるかを知らず。

人平生應事接物、自朝至暮、紛々營々、送了日子、曾不知_二自己是何等人物何等心地_一、

【訳】人は常日頃、出来事に応じ物に接して行動し、朝から夕方_二にいたってしま_一う。乱雑で且つあくせくと利を求めて日々を送っており、自分を見つめることもなく、果たして自分がどんな人間なのか、どんな心をしているのかさえ知らない。

一四二 試みに静中に向いて黙黙_{もくもく}として体験すれば、則ち理欲混淆_{りよくこんこう}して、紛然_{ふんぜん}として湧くがごとし。禁ずるも止まず、制するも伏_ふせず。乃_{すなは}ち始めて知る、自己は元是れ頑鈍_{がんどん}、元是れ庸劣_{ようれつ}、元是れ種々の病痛あり、極めて料理し難きを。

試向_二靜中_一黙々體驗、則理欲混淆、紛然如湧、禁而不止、制而不伏、乃始知、自己元是頑鈍、元是庸劣、元是種々病痛、極難_二料理_一、

【訳】試みに静かな所でただ黙まって静坐してみると、天理と人欲が入り混じってごちやごちやと乱れた考えが次から次に湧き出てくる。これを止めようとしても止まらないし、たちきろうとしてもたちきれない。そこで、初めて自分のことがわかる。自分はもともと鈍く、もともと愚かで、もともといろいろな欠点があり、それらをうまく処理していくことが難しいということが。

一四三 人は欺_{あざむ}くべきも、自らは欺くべからず。人は瞞_{だま}すべきも、自らは瞞すべからず。欺くべからざる処は敢_{みず}へて自ら欺かず。瞞すべからざる処は敢_{みず}へて自ら瞞さず。慎_{しん}独戒懼、収攝_{しゅうせつ}保任、此れぞ是れ靜中功を用ふるの力なり。

人可欺也、不可自欺、人可瞞也、不可自瞞、不可欺處不敢自欺、

不可瞞處不敢自瞞、慎獨、濁戒懼、收攝保任、此是靜中用功之方、

【訳】 人はうそをつくものだが、自分からはうそをつかない。人はあざむくものだが、自分からはあざむかない。決して自分からはうそをつかない。決して自分からはあざむかない。これを守って、自分一人だけいるときにも、心を正しく持ち、正しい行いをする。このことを自分の心の中に決めて守る。これを「慎独」という。これこそ、自分を高めるために自分でできる方法である。

144 (17/01/07)

一四四 私念稍少なければ、主宰稍明らかに、澹澹澄澄として、漸く佳境に入る。いはゆる大本未だ発せざるの中、寂然として動かざるの体は、此より手を得、此より基を建つ。方に是れ聖賢深造自得の学問なり。

私念稍少、主宰稍明、澹々澄々、漸入佳境、所謂大本未發之中、寂然不動之體、自此得手、自此建基、方是聖賢深造自得之學問、

【訳】 自分の利欲のことを考えることが少なくなれば、それに応じて心が澄みわたってきて、最良の状態になる。いわゆる喜怒哀楽などの感情が出てくる前の静かな心の状態になる。そこから、学問する方策を会得し、また学問の基盤を構築する。聖賢たちが学問の奥義を究め、自分のものとしてしてきたのはまさにこのようにしてである。

一四五 人、此の地位に至れば、事あると事なきとを論ぜず、時に随ひ処に随いて従容として自在に、動きて括られず、心広く体胖かに、事治まり理明らかに、内外整整、小大肅肅たり。家にあるも邦にあるも、井然として条理あらざるなきなり。

人至此地位、不論有事無事、隨時隨處從容自在、動而不括、心廣體胖、事治理明、内外整々、小大蕭蕭、在家在邦、莫不井然有條理也、

【訳】人がこのような境地に至れば、平生のときや何か変わったことがあるときなどに関係なく、その時に応じ、その所に応じて、自然に自由に行動することができる。心は広々と体は伸びやかに、すべてのことはおさまりがつき、道理が明らかになる。内にあっても外にあっても正しく整い、どんなことにも真剣になる。家のことも国のことも、筋道が通って乱れることはない。

一四六 山林隱逸の士は、宜しく清虚涵養し文史自ら娛しむべし。而して其の時事得失に於いては、則ち言ふべき所に非ざるなり。

山林隱逸之士、宜清虚涵養文史自娛、而其於時事得失、則非所可言也、

【訳】山林に隠れるように住んでいる者（私）は、心清らかに修養して詩文や歴史書を楽しんで読んでいる。そして、世の中の動きや損得については、あれこれと言うこともない。

一四七 均しく天地の間に生れ、均しく太平の雨沢を被る。其の君徳主恩に於いては、固より忘るべからざれば、則ち事に遇へば憂ひを抱き、又因つて言に形ること、蓋し亦勢ひの免れざる所なり。

均生乎天地之間、均被乎太平之雨澤、其於君徳主恩、固不可忘、則遇事抱

憂又因形於言者、蓋亦勢之所不免也、

【訳】誰も同じようにこの天地の間に生まれ、同じように平安の世の中の恩恵を受けている。もとよりそのことを忘れるものではないが、何かの出来事にあえば心配になり、思わず声に出してしまうことがあるのもやむを得ないことである。

一四八 天下の勢ひ、これを収拾すること甚だ難し。而るにこれを破壊すること甚だ易し。創業の君は、百戦万死、艱苦してこれを得。而るに後世子孫は、優游不斷、因循荒廢、遂にこれを宴席の上に失ふ。古より亡国敗家のともに同じき所なり。

天下之勢、收拾之甚難、而破壞之甚易、創業之君、百戰萬死、艱苦得之、而後世子孫、優游不斷、因循荒廢、遂失之於宴席之上、自古亡國敗家之所與同也

【訳】天下をまとめることはとても難しいことだ。しかし、それを破壊することはとてもやさしい。最初に国を創った人は、非常に苦労してこれを得た。しかし、これを継いだ子孫は思い切りが悪く、ぐずぐずして、為すべき事をしないでいて、遊びに夢中になってこれを失う。昔から、国が滅び、家が滅びるのはこのようにしてである。

一四九 是の故に治平の世を持するものは、宜しく宴安を以て自ら戒しむべし。而して朝乾夕惕、励精して禍を慮ること、漏舟の中に坐するがごとく、頭髮の焚けるを救ふがごとく、以て祖宗の基業を保ちて、金甌をして傷つき且つ欠くるに至らざらしむるは、方に是れ其の責めなり。

是故持_レ治平之世_二者、宜_レ以_レ宴安_一自戒、而朝乾夕惕、厲精慮禍、如_レ坐_二漏舟之中_一、如_レ救_二頭髮之焚_一、以保_二祖宗之基業_一、而使_二金甌不_レ至_一傷且缺_二者、方是其責也、

【訳】だから平和の世の中を維持し続けるには、遊び楽しむことを自ら戒めなければならぬ。そして、日中勤め励み、夜は反省して、禍の来るのをよく考えることだ。それは、水の洩れる船に乗っている気持ちで、頭髮にふりかかる火の粉を振り払うような気持ちで、勤めなければならない。そして、歴代の祖先の築きあげた立派な仕事を維持し、外国の侮りを受けないような尊厳を保つことは、世の中を平和に治めようとする者の義務である。

一五〇 責め大なれば則ち憂ひ深く、憂ひ深ければ則ち宵衣旰食、寢を忘れ居を忘れ、以て民隠を求めて国本を培ふ。文を脩め武を張り、以て不虞に備ふ。種々の計度、自ら己むべからざるものあり。

責大則憂深、憂深則宵衣旰食、忘寢忘居、以求_二民隠_一、而培_二國本_一、脩文張武、以備_二不虞_一、種々計度、自有_二不可已者_一矣、

【訳】責任が大きくなれば、いろいろ心配事も深く、心配事が深ければ政事に務め励み、寢食を忘れて人民の苦しみの原因を探って、国政の基本を築いていく。そのために、学問や武芸につとめ、思いがけないことに備えなければならない。いろいろと思い巡らすことをやめることができない。

一五一 物の、人を迷はすは、独り声色のみ然りと為さざるなり。人の失脚も、亦独り貨利のみ然りと為さざるなり。

物之迷人、不_レ獨_レ聾色爲_レ然也、人之失脚、亦不_レ獨_レ貨利爲_レ然也、

【訳】物事が人を迷わせるのは音楽や女色だけのことではない。人を失脚させるのも、お金や儲けだけのことではない。

一五二 方寸隱微の間に、黙黙と自ら体験するに、依然として仍ほ是れ世俗中の人なり。

方寸隱微之間、默々自體驗、依然仍是世俗中之人也

【訳】心の奥を、静かにかえりみると、依然として自分が今までのままで、世俗の中の人間であることに気づく。

一五三 痛く自ら洗滌して以つて後功を図らずんば、則ち倏忽の間、遂に一生を過し、以つて復すべからざるの悔いを成さん。豈に憾むべきの甚しきにあらずや。

不_レ痛自洗滌以圖_レ功、則倏忽之間、遂過_レ一生、以成_レ不可復之悔、豈非_レ可憾之甚耶、

【訳】深く心身を洗い清め、計画を建てて立派な仕事の達成を目指すのでなければ、たちまちのうちに、一生を過ごしてしまい、取り返しのつかない悔いのみがある。これほど残念なことはないではないか。

154(17/02/04)

一五四 言語は、少しく其の煩を省き、応接は、少しく其の雑を省き、事務は、少しく其の冗を省き、刻意斬絶、以つて收拾の功を為さば、則ち前途は尚ほ望むべきものなからざらん。

言語少省其煩、應接少省其雜、事務少省其冗、刻意斬絶、以爲_レ收拾之功、則前

途尚_レ無_レ可_レ望者_一也、

【訳】言葉は多すぎないようにし、客との応対はできるだけ無駄を省き、事務はその無駄や不必要なことは省き、一つのことに専心して、集中した生活をすれば、将来は望みがないことはない。

一五五 此れを以つて自_{みずか}ら慰め、此れを以つて自_やら遣る。吾人今日の一段の情況、真に憐れむべきなり。

以此自慰、以此自遣、吾人今日一段情況、眞可憐也、

【訳】このように思つて自分を慰め、このように思つて気持ちをほらしている。私の最近の状況は我ながら情けないところがある。

一五六 詩の辞たる、人情に本づき、歌詠に発す。而して其の詞、從_{しようよう}容_{かんかん}閑緩として、諷詠の間に、自_{ふうえい}ら人をして事理通暢、意思和平にして、其の性情の正を得しむるなり。

詩之爲辭、本_二於人情、發_二於歌詠、而其詞從容閑緩、諷詠之間、自_二使_二人事理通暢、意思和平、而得_二其性情之正_一也、

【訳】詩（經）の言葉というものは、人の心持ちにもとづき、歌として出ている。その言葉は、ゆったりと落ち着き、歌っている間に自ずと人をして物事を理解させ、心が和らがせ、心おだやかにさせて、その人の心を正しくする。

一五七 詩は本_{もと}格言莊語にあらざるなり。而して其の教を設くるや、他の經とは別なり。是の故に其れこれを読むものは、亦自_{おのずか}ら一種の方あり。

詩本_二非_二格言莊語_一也、而其設教也、與_二他經_一別、是故其讀之者、亦自有_二一種之方_一、

【訳】詩はもともと教えになったり、正しい議論をするものではない。だから、教え方を設けようとしても、他の「經書」の教えとは同じようにはいかない。だから、これを読む物は自ずから一種独特の方法があるのだ。

一五八 苟くも善くこれを読まざれば、則ち大抵は皆是れ閭巷の泛語なり。苟くも善くこれを読めば、則ち己を脩め人を治むるの道、其の中に具はらざることなし。而して警惕鑒戒、予を起すや多し。

苟不_二善讀_一之、則大抵皆是閭巷之泛語、苟善讀_一之、則脩己治人之道、莫不具於其中、而警惕鑒戒、起予也多矣。

【訳】仮にもよく読まなければ、大抵はみな村里のそら言みたいな物だ。しかし、これをよく読めば、自分を修め、人を治める道はその中に読み取れる。そして、自分を戒め、自分自身を目覚めさせることが多い。

一五九 畢竟、詩は是れ歌謡の詞なり。是の故に其れこれを読ものは、尤も其の辞を遊び、反覆曲折、其の趣を極め尽くして、事の理、物の情の、一種言説すべからざるの妙を、悠然として吟哦上下の間に自得するを要す。

畢竟詩是歌謡之詞、是故其讀_一之者、尤要_二玩其辭_一、反覆曲折、極盡其趣、而事之理、物之情、一種不可言説_一之妙、悠然自得於吟哦上下之間、

【訳】結局、詩（経）は歌の言葉だ。これ故にこれを読む者は、その言葉を深く考へ何度も繰り返し細かく味わい、読み味わい、その趣をよく極め尽くす。そのうえで、物事の道理やその中にある情の言葉には表せない妙をゆったりとして気分で、音階づけて声に出して歌い自分で理解する必要がある。

一六〇 詩を誦し義を求むること、固より力を著けざるべからざるも、亦痛くは力を著くべからざるなり。然るゆゑんものは、其れ人情の自然、始めより作意もてこれを為すにあらざるを以つてなり。

誦詩求義、固不可不_二著力_一也、亦不可_二痛著_一力也、所以然者、以其人情自然始非_二作意爲_一之也、

【訳】詩を口ずさんで正しい生きる道を求めることに、もとより力を注がないことはないが、強く力を入れすぎてはいけない。そのわけは、人の心というものは

初めから計画的に意図を持ってなしたものである。

一六一 歳ここに暮る。惕然として乃ち旧歳の空しく過ぐるを慨す。歳方に改まる。幡然として乃ち今歳の新しき功を図る。時にして警省憤發の地にあらざるはなきなり。庚辛

歳云暮矣、惕然乃慨。舊歳之空過、歳方改矣、幡然乃圖。今歳之新功、無時而非警省憤發之地也、庚申

【訳】今、一年がここに暮れていく。ふり返ってみて、過ぎていく年をむなしく過ごしたことを嘆く。年、今改まる。氣もちを刷新して、やって来る年に為すべき事に思いを巡らす。いつでも、顧みて自らを戒め、心を奮い立たせる機会はあるだろう。庚申（万延元年）

一六二 身を千巖万壑の中に埋め、黙黙として独り古道を遺經に求め、將に以つて千歳不磨の図を為さんとす。此れ予の私心自ら期する所のものなり。知らず、果して能く其の志を遂ぐるを得るや否やを。

巖

埋身於千巖巖萬壑之中、默々獨求。古道於遺經、將以爲千歳不磨之圖、此予之所私心自期者、不知果能得遂其志乎否、

【訳】私は多くの岩や谷に囲まれた草深い田舎に住んで、黙々と聖賢の残した書に探し求め、永久に残るものを作り上げようとしている。これは私自身の決意である。ただこの志が、よく遂げられるかどうか。

一六三 余、嘗つて陳白沙先生集を觀る。首めに其の白沙里の図を載す。江山風煙の間、衡門茅屋、蕭然として自ら高栖の趣あり。余も亦將に画人を倩ひて青谿山房の図を作る。而して百歳の後、若し或ひは余の遺文を集むるものあらば、則ち此れを以つて卷首に置き、他人一篇の序文に代へんとす。

余嘗觀陳白沙先生集、首載其白沙里圖、江山風煙之間、衡門茅屋、蕭然自有

高栖之趣、余亦將_二倩_一畫人、作_二青谿山房圖_一、而百歲之後、若或有集_三余之遺文_二者、則以此置_二卷首_一、代_二他人一篇之序文_一也。

【訳】私は、かつて陳白沙先生集を見たことがある。その初めに白沙の里の図を掲載している。山と川と風になびくかすみを描かれ、隱者の茅_{かや}葺_ふきの粗末な家があり、ものさびしくして自ずと世を逃れながら、志高く暮らす趣があった。私もまた、画家に頼んで青谿書院の図を作った。それで、もし百年後に、私の残っている文章を集めるものがあれば、その時はこれを巻頭に載せ、序文の代わりにしてほしい。

164(1704/01)

一六四 前山の峰、長松の枝、鶴、来たりて其の上に栖_すむ。欄に倚りてこれを望めば、則ち適_{まさ}に以って吾が山房の風致を倍するに足る。

前山之嶺、長松之枝、鶴来栖_す其上、倚欄而望之、則適足_三以倍_二吾山房之風

致_二矣_一、

【訳】前山の峰にある長い松の枝に、鶴(コウノトリ)がやって来てその上に巢を作り住みついている。欄干に寄りかかりこれを見ると、山中の私の住まいの趣のすばらしさは倍加する。

一六五 学問の道は、尤_{もつと}も養を貴ぶ。蓋_{けだ}し養は一日にして為すべからず。其れこれを存するに常あり、これを行ふに素あり。習熟_{こんせい}渾成して、漸く自然に帰る。故に其の成るや、これを富貴_{ふうき}貧賤_{ひんせん}の間に処_おくも移らず、これを声色_{せいしよくふんか}紛華の境に投ずるも乱れず。恃_{たの}むべしと為すゆゑなり。然らざれば則ち記誦_{きじよう}廣しといへども、文才富むといへども、胸中却って一定の守あることなし。其の、事に臨むに及んでは、則ち蹶_{けつぜん}然として動く。

學問之道、尤_二貴_一乎養、蓋養不可_二一日而爲_一、其存之有常、行_レ之有素、習熟渾成、漸歸_二自然_一、故其成也、處_二之於富貴貧賤之間_一、而不_レ移、投_二之於聲色紛華之境_一、而不_レ亂、所以爲_二可_レ恃_一也、不然則記誦雖廣、文才雖富、胸中却無有_二一定之守_一、其及_レ臨事也、則蹶然而動矣、

【訳】学問していく道で大切なことは、学んだことを自己の内に熟成させること、

すなわち修養である。それは一日でできるものではない。平素より常にそう心がけてはじめて修養は培われ、行いとなつてできる。学んだことによく慣れ親しみ、それらを一つに融合してはじめて自身の自然な心の動きとなつていく。だから、修養ができておれば、富貴貧賤の境遇になつても、華やかな世界においても、節操を失つたり乱したりすることはない。そうでなかったら、記憶や暗誦がよくできるといつても、文才が富んでいるといつても、胸の中を守るべき節操は存在しない。修養したことは、事に臨んだ際には、すばやく力強く動くものである。

一六六 学ぶ者は經典を除くの外は、凡そ先輩の著撰^{ちよせん}も、此の学の明晦^{めいかい}に閑せざるものは、敢へて読まざるなり。記伝策論の類も、天下の安危、世道の汚隆^{おりゆう}に係はらざるものは、亦敢へて読まざるなり。かくのごとく断定し、敢へてかりそめに翻閱^{ほんえつ}せずんば、則ち読書序あらん。庶^{こいねがわくば}乎其の要を得んことを。

學者除經典之外、凡先輩著撰、不闕乎此學之明晦者、不敢讀也、記傳策論之類、不係乎天下之安危、世道之汚隆者、亦不敢讀也、如此斷定、不敢苟且翻閱、則讀書有序、庶乎得其要矣、

【訳】学問を志す者は、四書五経以外は、たとえ先人の著作であっても、自分が明らかにしようとしている学問に関わりのないものは読まない。歴史や伝記や時事論文なども、世の中の安心安全や世の道徳に関わらないものは読まないでおく。このように決めて、思いつきで本を開かなかつたら、読むべき本の順序がわかってくる。どうかその要領を身につけてほしい。

一六七 経を講じ史を読み、経綸の技量を琢磨す。閑を牢して固く距^{ふせ}ぎ、時を待ちて動く。山林高尚の素志^{そむ}に負かざるを庶^{しよき}幾するなり。

講經讀史、琢磨經綸之技倆、牢關固距、待時而動、庶幾乎不負山林高尚之素志也、

【訳】経書を講義し、歴史書を読んで、天下を整える技量を磨く。門を堅く閉じ、いつか動くその時を待っている。山林での高い立派な初志に背いていないことを願っている。

一六八 水の流るるや、奔湍^{ほんたん}と為り、激流と為り、洄洑^{かいふく}と為り、千里の平潟^{へいせき}と為る。特遭^{ただ}ふ所の地に因りて形を為すのみ。人の生まるるや、樵漁^{しょうぎよ}と為り、版築^{はんちく}と為り、溝中の瘠^{せき}と為り、廊廟^{ろうびよう}の宰と為る。亦遇^あふ所の時によりて変を為す。水は本心なく、聖賢も亦更に何の意かあらん。此の間只太公順応を要するのみ。

水之流也、爲_レ奔湍、爲_レ激流、爲_レ洄洑、爲_二千里之平潟、特因_一所遭之地、而爲形、人之生也、爲_二樵漁、爲_二版築、爲_二溝中之瘠、爲_二廊廟之宰、亦從_一所遇之時、而爲變、水本無心、聖賢亦更何意、此間只要_二太公順應、而已矣、

【訳】水が流れる様子は、速い流れのところ、激流となるところ、渦を巻くようなところ、広い干潟となるところがある。ただ、その会うところの地形によつてその形があるだけだ。人が生まれてどう生きるかも、水の流れと同じこと。木こりとか漁夫になるひと、土木工事する人、溝の中に死体となる人、朝廷の宰相となる人。これらもまた、会うところのそのときによつていろいろ変わるものだ。水はもともと意思なく、聖人賢人もまた、何になろうとするような意思があるのか。ただ、長い間万事にかたよることなく公平に対応していくだけである。

一六九 命^{めい}にあらざるはなきなり。順^{したが}いて其の正を受く。然らば則ち物は命あらざるなきなり。而して正と不正とは、受くる所を撰ばざるべからざるなり。

莫非命也、順受_二其正、然則物無_レ不_レ有_二命也、而正與不正、不可_レ不_レ擇_二所受也、

【訳】天命でないものはない。従つてそれをそのまま受け取る。だから物事も天命でないものはない。それで、（おこつてくる物事が）正しいかどうかは受け止める側が選ぶことから起こってくるものだ。

一七〇 山間の寒氣尚^なお甚^{はなはだ}しく、梅花未だ開かず。是を以つて春來りて数旬なるも、未だ嘗^{かつ}て門戸を窺^{うかが}わず。

山間寒氣尚甚、梅花未開、是以春來數旬、未嘗窺_二門戸、

【訳】山間の寒氣はなおきびしく、梅の花はまだ開かない。春が来てからずいぶんなるのに、まだ門の外から、中の庭の梅が咲いたかどうかうかがうようなこと

はない。

一七一 学ぶ者は其の身を奉ずること、当に金玉のごとく然るべし。微しく闕失あれば、則ち以つて天下の至宝と為すべからず。

學者奉其身、當如金玉、然微有闕失、則不可爲天下之至寶矣、

【訳】学問するものが自分自身を大切にすることは、自分を金玉のように貴重なこととして扱うことだ。少しでも欠けた所があれば、世の中の宝とすることはできない。

一七二 読書は精を貴び、用功は実を貴ぶ。此の二者は君子の、学を為すゆゑなり。

讀書貴精、用功貴實、此二者君子之所以爲學也、

【訳】読書は細やかに丁寧に読むのが大事で、実践は身近で実のあることが大切である。この二つのことが、君子と言われる人が、学問する上で欠かせないことだ。

一七三 人の、酒を嗜む、其の始めは未だ必ずしもかくのごとく甚しからざるなり。習ひて止まざれば、終に以つて此に至る。

人之嗜酒、其始未必如是之甚也、習而不止、終以至此、

【訳】人が酒飲む。最初はたくさん飲むことはなく味わう程度である。それが習慣になって止めなかったら、ついには大酒を飲むことになる。

一七四 人を知るは知の先務にして、賢に親しむは仁の先務なり。人君苟くも能く人を知りてこれに親しめば、則ち天下の才皆其の用を得て、政事举がらん。これを人の身に譬ふるに、苟くも能く其の口腹を養へば、則ち頭髮耳目四支百骸、自ら其の養を得ざるものなからん。

知人、知之先務、親賢、仁之先務、人君苟能知人而親之、則天下之才皆得其

用、而政事舉矣、譬諸人之身、苟能養其口腹、則頭髮耳目四支百骸、自無_レ不得其養_二者_一矣、

【訳】 人を知るということが、知るということの第一のことであり、人と親しくすることが仁の第一のことである。君主がよく人を知り、人に親しくすれば、世の中の優れた人はみんな自分の能力を発揮し、政治は成果があがるだろう。このことを人の体に例えてみると、少なくともその食べるものを十分にとれば、頭髮耳目そして両手両足隅々の骨まで、その効果を受けないものはないということだ。

一七五 易の大畜に曰く、「剛健篤実にして、輝光日に其の徳を新たにす」と。夫れ内に剛健の強_{きよう}あり、而して外、篤実を以つてこれを守りて、然る後其の徳、光輝発越す、日に新たにすと謂ふべし。これを泉に譬_{たと}ふれば、其の源は滾滾として昼夜を舍_おかず、而して更に堤防を築きこれを儲_{たくわ}へて、然る後停畜_{ていちく}瀾漫_{らんまん}し、以つて其の盛を極む。然らずして随ひ出で随ひ流れて、少しも禁遏_{きんあつ}せざれば、則ち終日湧_わくといへども、夫れ涓涓_{けんけん}の微、安_{いず}くんぞ能く其の科_{あな}を盈_みたさんや。古人のいはゆる道に聴_とき塗に説く_との学は、其の弊亦猶ほかくのごとし。

易之大畜曰、剛健篤實、輝光日新_二其徳_一、夫内有_二剛健之彊_一、而外以_二篤實守之_一、然後其徳光輝發越、可_レ謂_二日新_一、譬_レ之於泉、其源滾々弗_レ舍_二晝夜_一、而更築_二堤防_一儲_レ之、然後停畜瀾漫、以_レ極_二其盛_一、不_レ然而隨出隨流、不_レ少禁遏、則雖終日而湧、而夫涓々之微、安能盈_二其科_一哉、古人所謂道聴塗説之學、其弊亦猶_レ此、

【訳】 「易經」の大畜に「強いからだに誠実であれば、輝くように日にその徳を新しくする」とある。それは内面に強さがあり、誠実さでそれを守れば、その人の徳は光り輝き、日に新たになるということ。これを泉に例えれば、こんこんと昼も夜もとどまることなくわき、これを堤防を作つてこれを蓄えれば、水が深くなりいつぱいになり、盛んになる。そうでなければ、少しずつ出て流れてしまい、それを止めなければ、一日中わいているといつても、ちよろちよろの流れがどうしてよくその池をいつぱいにするのができようか。昔の人が言っている学んだことを知つたふりをして、他人に説く誤りはこのようなことだ。

一七六 凡そ物は要を知るを貴ぶ。王公にして治道、要を知らずんば、則ち宵衣旰食し、励精怠るなしといへども、功成らざらん。宋の神宗、明の思宗のごときは是れなり。学ぶ者にして書を読みて要を知らずんば、則ち汗牛充棟、万巻読破すといへども、徳立たざらん。明清以来、儒者多く其の病あり。

凡物貴知要、王公而治道不知要、則雖宵衣旰食、厲精無怠、而功不成、如宋之神宗、明之思宗是也、學者而讀書不知要、則雖汗牛充棟萬巻讀破、而徳不立、明清以來儒者多有其病、

【訳】何事でも、物事は根本のところを知ることが大事である。王公の政治の方法にしても、根本を理解していなければ、政治に務め励んで一生懸命やっても、成果は表れないだろう。宋の神宗、明の思宗はそうであった。学ぶものが根本を理解していなければ、多くの書籍を持ち、たくさん読んだとしても、人徳は育たない。明や清の時代以来、多く儒学者にはその間違いがある。

一七七 学ぶ者既に其の要を知れば、則ち力を著くるには緊を貴び、功を用ふるには厚を貴ぶ。既に緊且つ厚なれば、則ち又規模遠大にして優游迫らざらんことを欲するなり。若し夫れ根器小にして意見陋に、促迫蹙溢なる者は、做し難し。

學者既已知其要、則著力貴緊、用功貴厚、既緊且厚、則又欲規模遠大優游不迫也、若夫小根器陋意見促迫蹙溢者、難做、

【訳】学ぶ者で、その要点を知っている者が学問に努力するには、緊張感を持って丁寧実践していくことが大切である。すでに緊張感があり丁寧であれば、心が広く、のびのびとしてしていることが求められる。もし、それが性格的に器量小さく、考えが狭く、こせこせしているものは、学問を成し遂げることができないだろう。

一七八 墨子は兼愛を以つて宗と為し、楊子は我が為にするを以つて宗と為す。而して告子の義外、許行の併耕は、皆主張する所あり。乃ち其の謬妄は見易し。而るに郷原は則ち更に異を立てず、依違として調停し、似を以つて真を乱す。則ち其の害又甚しきものあり。吾故に曰く、「楊墨告

許は、賊の、外にあるものなり。郷原は、賊の、内にあるものなり」と。外にあるものは固より排すべきなり。而して内にあるものは尤も除かざるべからざるなり。是の故に孟子も最後に又郷原を闢く。蓋し亦以つて終身道を衛るの苦心を見るに足る。

墨子以兼愛爲宗、楊子以爲我爲宗、而告子之義外、許行之并耕、皆有所主張、乃其謬妄易見、而郷原則更不立異、依違調停、以似亂眞、則其害又有甚焉者、吾故曰、楊墨告許、賊在外者也、郷原、賊在内者也、在外者固可排也、而在内者尤不可不除也、是故孟子最後又闢郷原、蓋亦足以見終身衛道之苦心一矣、

【訳】墨子は自分の家族と他人を分け隔てなく愛するということを大切にし、楊子は自分中心に行動することを中心と考えていた。そして、告子の人の行うべき道の義は心の外にありという主張、許行の君民だれも同じように農作業するという主張、みなそれぞれ言うところの理由はある。そして、その誤りは見つけ易いものだ。それなのに、村の有徳者のようにふる舞っている郷原は決して間違っているとは言わないで、いい加減に調停してどっちつかずではつきりしないまま、偽物をもって本物を乱してしまう。その悪い影響は大きなものがある。だから私は言っている、「墨子、楊子、告子、許行らは、賊が自分の外にあるようなものだ。郷原は賊が心にあるようなものだ」と。外にある賊はもとより遠ざけるべきである。そして、心にある賊は、最も除かなければならない。だから、孟子も最後には郷原を避けている。こういうことから、終身道を誤らないで守っていくことの苦心が伺える。

一七九 今の儒士はややもすればすなはち狂者と曰ふ。狂者以つて自ら比擬す。蓋し自らを知らざる者と謂ふべきなり。而して又古人を知らざる者と謂ふべきなり。夫れ狂者は、高明快活にして、爽朗として超脱す。乃ち夫の曾點の、志を言ふを視るに、舞雩浴沂、三三両両、絶えて夫の富貴功名、鄙俗塵土を以つて吾が胸中を礙げず。其の識見興趣、如何ぞ及ぶべけんや。今、其の庸陋の資、齷齪の意を以つて、終日營營として、区区たる名利の間に従事し、而も妄に自ら量らず、以つて相比擬す。吾故に曰く、「自ら知らざるものなり、而して又古人を知らざるものなり」と。

今之儒士動輒曰狂者、狂者以自比擬、蓋可謂不自知者也、而又可謂

不_レ知_二古人_一者_レ也、夫狂者、高明快活、爽朗超脱、乃視_二夫曾點之言_一志、舞雩浴沂、三々兩々、絶不_レ以_二夫富貴功名鄙俗塵土_一礙_中吾胷中、其識見興趣、如何可_レ及也、今以_二其庸陋之資、齷齪之意、終日營々、從事乎區々名利之間、而妄不_二自量、以相比擬、吾故曰、不_二自知_一者也、而又不知_二古人_一者也、

【訳】今頃の儒者は自分を、志が高く小さなことにはとらわれない狂者だと言って、自分を狂者になぞらえている。しかしこれは、自分をよく知らない者の言うことだ。また、古人をよく知らない者とも言える。狂者という者は、学徳がすぐれ、明るく元気で、さわやかで世俗に染まらない者のことをいう。孔子が弟子に志しを言わせたとき、あの曾點は、沂水で湯を浴びて舞台で涼しい風に吹かれ、三人五人と連れだつて道を帰ると言っている。まったく富貴功名も、いやしく下品なことも胸中にはない。そのものの考え方、おもむき、なかなか及ばないことだ。今、愚かで卑しく、あくせくして、終日あわただしく小さな名利にとらわれ、自分のことは顧みないで、狂者になぞらえている。だから、私は言うのだ、「自分をよく知らないのだ。また、昔の人のこともよく知らないのだ」と。

一八〇 孟子は戦国の時に生まる。举世茫茫として、一も其の意を可とするものなければ、乃ち古人の中に就きて、旁搜探求、纔かに伯夷・柳下恵の二士を得たり。二士の徳、これを夫子に比ぶれば、固より偏なるを免れず。然れども其の力を得るの処に至つては、則ち超卓不群にして、千古一人なり。則ち歎仰欣服し、以つて吾が志氣を振ふ。蓋し其のいはゆる尚友なるものなり。

孟子生_二戰國之時、舉世茫茫、一無_レ可_二其意_一者、乃就_二古人中、旁搜探求、纔得_二伯夷柳下恵之_一二士、二士之徳、比_二之夫子、固不_レ免偏、然而至_二其得力之處、則超卓不群、千古一人矣、則歎仰欣服、以振_二吾志氣、蓋其所謂尚友焉者也、

【訳】孟子は戦国の世に生まれた。世の中はまさに百家争鳴、一人として孟子の意にかなうものはなかったので、昔の人の中に広く探し求め、ようやく伯夷、柳下恵の二人を探し得た。二人の徳は、孔子に比べれば、もとより及ばないことだ。しかし、その考え方には大変教えられ、千年に一人の人だと言つていい。その人の考え方に従うことで、孟子は自分のやる気を出してきた。まさにこれが古人を友とする、いわゆる尚友ということだ。

一八一 緑陰新たに成り、青苔塵なし。 薙むしろを設け茶を煎せんじ、聊いささかか世外半日の游を為す。 文久辛酉春、湯島に遊ぶ。

緑陰新成、青苔無塵、設薙煎茶、聊爲世外半日之游

【訳】 緑陰が広がり、青々した苔には塵も一切ない。 薙むしろをしいてその上でお茶を煎じて飲む。 しばらくは、煩わしい浮き世から離れて過ごす。

文久二年（一八六一）春、城崎の湯島に遊ぶ。（草庵四十九才）

一八二 游行半月、虚しく光陰を過す。 毎毎かくのごとし。 此の生あ豈に惜しまざるべけんや。

游行半月、虚過光陰、毎々如是、此生豈可不惜、

【訳】 あちこちを巡り歩いて半月、無駄に時を過ごした。 いつもこんな調子だ。 今生きていることを、なんと惜しまないでいることか。

一八三 古人は、惜陰せきいんの念、常に今人に異なる。 是れ今人の道德功業、皆古人に及ばざるゆゑなり。

古人惜陰之念、常異於今人、是今人之道徳功業、皆所以不及古人也、

【訳】 昔の人は、月日を惜しむ気持ちは、今の人とは違っている。 このことが、今の人の生き方や成し遂げることが、昔の人に及ばないわけである。

一八四 賢人君子た為らんと欲するか、愚不肖ぐふしょう為らんと欲するか。 反觀内省、惟此ただの志の立ち得ると立ち得ざるとにあるのみ。

欲爲賢人君子乎、欲爲愚不肖乎、反觀内省、惟在此志之立得與不立得耳、

【訳】 賢人君子になろうと思うか、愚かなつまらない人間でもいいと思うか、そ

れは、ただ自分をきびしく返りみようとする反観内省を、やつていこうとする志があるかないかによって決まる。

一八五 方丈の室、琴瑟簡編、藥爐茶鼎。資用の物は、必ずしも多きを須^{もち}ひず。此れぞ是れ世外隱逸の人の活計なり。

方丈之室、琴瑟簡編、藥爐茶鼎、資用之物、不^レ必須^二多、此是世外隱逸人之活計、

【訳】私の小さな部屋は、琴や書物、薬を煮るいろり、茶器がある。生活に必要なものは必ずしもそんなに多くは必要ない。これが世を離れて山に住むもの生活維持に必要なものだ。

一八六 家にありては則ち子弟の職を共にし、館に入りては則ち師長の教を奉じて、敢へて背違せざるは、乃^{すなわ}ち是れ爾輩^{じはい}の日用切実の功夫なり。

在家則共^ニ子弟之職、入^レ館則奉^ニ師長之教、不^レ敢背違^二者、乃是爾輩日用切實之功夫、

【訳】家にいるときは、兄弟たちとともに生活し、塾にすれば先生や年上の人たちの教えを聞き、背かない。すなわち、こういうことが君たちの普段の生活の中で大切にしなければならないことだ。

一八七 威儀は肅ならんと欲し、衣冠は整ならんと欲す。凡そ日間^{にっかん}為す所の事は、皆極めて道理に循^{したが}はんと欲す。

威儀欲^レ肅、衣冠欲^レ整、凡日間所爲之事、皆極欲^レ循^ニ道理、

【訳】おごそかで、礼儀正しい態度は、厳肅であつてほしいし、身につける衣服や冠はきちんと整つていてほしい。おおよそ、日常に行おうとすることは、こういう人として行ふべき道に従つてほしいものだ。